『女学雑誌』「小供談」の試み
――〈児童文学〉生成期をめぐる一考察――

青木文美

〈小説〉草創期と〈児童文学〉

〈児童文学〉は、いかにして誕生したのか。福田清人は、「児童文学は、常に成人文学の後に、数歩おくれて歩いてきた」といい、明治期の児童文学を「初期（明治初年―二三年）＝胎動期」、「中期（明治二四年―二七年）＝誕生期」、「後期（明治二八年以降）＝成長期」と分類した。[1] そのなかで、「女学雑誌」が「初期」に「児童雑誌ではないが（略）童話を極めて早い時代からのせた」ことにふれ、「児童文学史上、大きな貢献をした」と評価したことは極めて重要である。

しかしながら、一般的に「初期」は、最初の創作童話といわれた巌谷小波「こがね丸」登場までの「胎動期」として認識されるにとどまっている。そのため、「こがね丸」の登場を〈児童文学〉の誕生と捉え、そこに至るまでの試行錯誤は看過されてきた。しかし、「胎動期」とは、唯一、一般の文学と児童文学とが未分化だった時期でもあるのだ。したがって、〈児童文学〉というジャンルが誕生するまでの議論は、同時に、坪内逍遥「小説神髄」にはじまる〈小説〉と〈物語〉との連関に迫る議論でもあるといえる。

つまり、〈児童文学〉というジャンル誕生のプロセスには、近代文学の根幹を鋭くえぐる課題が含まれているのだ。〈小

説〉の草創期に深く関わっているということは、子どものための文学という一面にだけ囚われるべき問題ではないはずである。仮に、〈児童文学〉というジャンルを〈物語〉の系譜として捉えたならば、〈小説〉の成立過程における〈物語〉の役割やその成果を追求できないだろうか。

本稿では、福田が指摘した『女学雑誌』「小供談」[2]欄に焦点を当てて、〈児童文学〉生成期を取り巻く諸問題について考えたい。どのような問題が、「初期」に議論されていたのだろうか。いったい、児童、婦女子と〈小説〉、〈物語〉との関係はどのように扱われているのだろうか。手はじめに、「小説神髄」から確認していこう。

昔話と児童、婦女子の位置——坪内逍遥「小説神髄」の場合——

坪内逍遥は、「小説神髄」上巻で、〈小説〉の優位性を論証するために、「猿蟹合戦」をはじめとする日本の昔話の性格と読者への効果、その限界とを論拠として提示した。そこには、当時流行していたダーウィンの進化論の影響が色濃く投影されている。逍遥は、「奇異譚の濫觴」に「鬼神誌」を設定した。「鬼神誌」とは、「真実の物語」であり「決して遊戯の作」ではないが、「謬信訛伝」で「其伝記の妄誕」であることも含まれた「史」である。「仮作の話譚と訛伝の事蹟」とが混じり合い、「なかばは正史に属し」つつも「なかばは小説に類するもの」である。そこで、逍遥は虚実の混じり合った「鬼神誌」に〈小説〉のはじまりを設定した。「鬼神誌」から「寓言の書」へ。「寓言の書」から「寓意小説」へ。「寓意小説」から「勧懲小説」へ。「勧懲小説」から「模写小説」へ。「模写小説」を到達点とした「仮作物語」の進化の過程を示した。ただし、この進化の過程をめぐる言説には、章によって解釈の仕方に違いが見られる。「小説の変遷」では、「鬼神誌」から「勧懲小説」までを「ローマンス」と捉えている。一方、「小説の種類」では、「寓意小説」までを「奇異譚（ローマンス）」、「勧懲小説」と「模写小説」を「尋常の譚（ノベル）」というように、物語世界の時間が現在のものか否かによって

分割している場合もある。

いずれにしても重要なことは、逍遥が「仮作物語」の進化の過程に昔話などの「寓言の書」を位置づけたことである。ところが、昔話をはじめとする「奇異譚」は、〈小説〉の時代を迎えると、極端に語られる機会が失われていった。かわりに小説の形成や文体、内容など〈小説〉にのみ限られた議論が繰り返されるようになった。

そもそも逍遥は、昔話などの「寓言の書」やその読者である児童、婦女子をどのように捉えていたのだろうか。「小説神髄」を確認すると、「小説の変遷」、「小説の裨益」「〈第二〉人を勧奨懲誡なす事」で具体的な言及を行っている。はじめに「小説の変遷」から見ていこう。ここでは、「寓言の書」の性格、具体的な作品名、そして、大人への効果と童幼婦女子への影響力について書かれた箇所がある。「寓言の書」の性格から確認しよう。

「寓言の書」とは、「英国にていふフヘイベル[3]」を指す。その意義は、「無稽の小説に諷意を寓して、童幼婦女子の蒙を啓き、奨誡なす」ところにある。その物語は、「浮屠氏のいはゆる方便」の要素を多分に備えたものである。「其脚色も単純」で「只皮相をのみ閲する時にはいと淡くして味」がないようだが、「玩読して其隠微をしも味ふときには、所謂寸鉄人を殺す深妙の旨趣を見る事」があるほど奥が深い、と定義している。具体的には、外国のものならば、「『イソップ物語』や『荘子』の寓意[4]」、日本のものでは、「「猿蟹合戦」の物語、又は「桃太郎」の昔話、「舌切雀」、「かちかち山」」などがそれに属するという。

逍遥は、日本の昔話に対して、「皮相なる物語はきはめて甲斐なきものに似たれど、其真相を見るに及びて頗る深意あ」る読み物だと認識していた。しかし、これらの「深意」は、「大人具眼の士」には少々単純であるという。なぜならば、「文運ます〳〵進歩して開明の世」になり、「世の流行もむかしに似ず」「奢侈に傾き」、「万の事みな贅沢」になるほど時代が進化したならば、「寓言の書」は本来の意味を失うことになるからだ。したがって、「荘子」のような傑作を除いた「フヘイブル」の「諷誡の旨」は、「次第に効なきもの」となり、「たゞ其文の巧みなると、其結構の妙なるをば賞玩なす」だけ

になる。つまり、心に迫るものではなく、ただ文体や構成を味わうだけのものでしかないと捉えているのだ。「大人具眼の士」にはもの足りない「寓言の書」であるが、児童、婦女子にとってはどうであろうか。

対象が「童幼婦女子」の場合であっても、その作品が「劣等の作」であれば「童蒙のお伽ばなし」、あるいは「婦女子ばら」の「玩具の一種」程度のものとして扱われるに過ぎないと考えていた。そのため、「其目的」であるはずの「諷刺」は全く理解されることはない。しかも、彼らは「たゞ脚色にのみ眼を留めて、其含蓄せる寓意」があることに気がつきもしないだろうというのだ。なぜならば、「猿蟹合戦」などの物語を「小児にかたり聞かする祖母、母親」の多くが、これらの「寓言の書」に隠されている「深意」に気がついていないからである。「深意」というものがあることさえも知らないからである。「たゞ一通りのつくりばなし」と同様に、単なる面白いはなし程度にしか受け取っていないのだ。その結果、「寓言の書」は、それよりも複雑化した「西遊記」などの「寓意小説」にその座を奪われ、いずれは誰も読まないものになると規定した。

要するに、逍遥の考える「寓言の書」は、「大人具眼の士」には「たゞその文の巧みなると、其結構の妙なるをば賞玩なす」ものでしかない。対象を児童、婦女子に限定したとしても、「童蒙を啓く」点では優れているが、それを「かたり聞かする祖母、母親」に「深意」を読み取る力が備わっていないために正しく理解されないと考えていた。いずれにせよ、「寓言の書」は消える運命にあるというのだ。

では、児童、婦女子にはどのような物語が相応しいのだろうか。また、彼らが物語と触れ合う場合、どのような配慮をすればよいのだろうか。児童、婦女子と物語との関係に注目して、「小説の裨益」「(第二) 人を勧奨懲誡なす事」を見てみよう。

ここでは、「人生の大機関」を表した〈小説〉が「嫩若き童男童女」に与える影響、また、彼らが陥りやすい問題点とその理由について言及している。東西問わず、年若い者が〈小説〉を読む習慣はある。しかしながら、これは非常に「危険

なる習慣」であるという。なぜならば、若年者と成人とでは、影響の受け方に違いがあるからだ。「幼少なる時」というのは、「感能」が「もつとも敏」である。そのため、「外部の刺戟を感ずること」が、「大人にもましていと鋭」いといえる。したがって、〈小説〉に限らず、「人心に甚だしき刺戟、感触」を与えるものは、「近づけざる」ことが最善の方法である、と考えていた。

本来、〈小説〉などの「美術」というものは、「玩具」である。「玩具」であることに「相違」はない。しかしながら、これらの「玩具」は、「大人、学士の玩具」であるから、それほど疑念を持つ必要がない場合であっても、「児童の玩具」として供えることはするべきではないという。その理由は、「婦女児童」の性質が「元来稚蒙浅学」であるからだ。たとえ〈小説〉を読んだとしても、単純に「脚色を読む」だけでその奥にある「寓意などは決して得知る」ことはないだろう。そうは言っても、「善悪美醜の弁別」が全くないとは言い切れない。たとえば、「奨誡主眼の小説屢々通読する」ようになれば、「勧懲の意はしらず〳〵」のうちに身に備わるだろう。その結果、「行為」にその「影響」が見られるようになることもある。ただし、その影響力は、「具眼の」読者に「比すれば弱」いといえる。それは、元々〈小説〉が「婦女児童の為に」ある訳ではないからだ。

逍遥は、「仮作物語」の到達点を〈小説〉に設定し、昔話などの「奇異譚」を〈小説〉に至るひとつの過程として捉えた。それは、長く親しんできた「猿蟹合戦」や「西遊記」などの「奇異譚」を排除したことを意味する。そして、新しい「仮作物語」である〈小説〉の読者を「大人、学士」に限定した。これに入らない「婦女児童」は、〈小説〉の読者から排除されたのだ。さまざまなものの排除が、同時に〈小説〉の成立を促した。そして、「小説神髄」で定義された〈小説〉という「仮作物語」や読者の設定の仕方が、一八八〇年代後半の文壇の標準として認知されることになる。一八九〇年までに発表された〈小説〉に関わる評論は、殆どのものが「奇異譚」や「婦女児童」にふれてはいない。

ところが、一八八七（明治二〇）年「女学雑誌」に発表された巌本善治の「小説論」は違っていた。周囲が排除した婦

女子と読書との関係に焦点が絞られていたからだ。彼の狙いとは何か。次に、巌本善治が「小説論」をはじめとする評論で試みた内容を確認しよう。

『女学雑誌』、あるいは巌本善治の試み

坪内逍遥「小説神髄」発表から遅れること一年半、一八八七（明治二〇）年の秋に巌本善治「小説論」は『女学雑誌』に掲載された。「（第一）小説を読む善悪の事」、「（第二）小説の善悪を批評する標準の事」、「（第三）女流、小説を読むの覚悟の事」と各号ごとに小見出しの付けられたこの論は、『女学雑誌』第八二号から第八四号までの「社説」として巻頭に掲載された。内容は、〈小説〉の読者から排除された女性と〈小説〉との関係に言及したものである。要するに巌本は、逍遥が切り捨てた女性読者たちが、〈小説〉の読者として認知される方法を提示したのだ。

女性、特に一八歳に満たない年少女子と〈小説〉に関する発言は、これだけではない。翌年一月の第九五号に掲載された「二付録の序」「第一。子供のはなし」にも見られるからだ。彼は、この欄で子どもにわかりやすい海外の読み物や日本のおはなしを紹介した。海外の作品の多くが翻訳ものであったにも拘らず、そのことにはふれなかった。[5] なぜ、巌本は「第一。子供のはなし」で紹介する物語の多くが翻訳によるものであることについてふれなかったのだろうか。この欄は、多くの物語を紹介するためだけに用意されていたのだろうか。あるいは、ほかの意図があったのだろうか。女性と〈小説〉との関係を提言した「小説論」に、なぞを解き明かす鍵が隠されていないだろうか。この欄の趣旨を探るために「小説論」を確認してみよう。

人間は、「自己の経験する」ことや「将に経験せんとするところ」の出来事に関心を寄せる。だから「実歴伝記小説本等を見聞することを喜ぶ」のだ。もちろん、「男女老少によつて」関心の高さは異なっている。しかし、「少年は必ず老人よ

りも強く」興味を示すし、「女性は大率ね男子よりも深」く影響を受けるものだ。したがって、女性の啓蒙を謳った「女学雑誌」は、女性読者に向けて「小説の道徳を論じ小説の改良を論じ小説果たして人に益あるや否やを論定」することが、その役割である。それが、「小説論」の執筆理由である。

巌本は、将に逍遥が排除し、その後論じられることのなかった女性読者に焦点を絞った発言を行った。読者の選定の仕方に異論を唱えるだけでなく、果たして、その主張までもが逍遥と異なっているのだろうか。

彼は、排除すべき〈小説〉に「支那日本在来の小説」をあげた。なぜならば、これらの「小説」は、「小説神髄」では、「寓意小説」にその座を奪われいずれ消える「奇異譚」とされていたからだ。つまり、逍遥が示した「仮作物語」の進化の過程を支持したわけだ。巌本は、女性を〈小説〉の読者として位置づけはした。ところが、その主張は逍遥の発言の延長線上に置いたに過ぎない。逍遥の進化論に従えば、〈小説〉は哲学理学の発達と同じように「自然の有様に随ひて自然の有のまゝを写すの外最良の策なきことを示すに到を止む」ことになる。起り得ない話を語ることは愚かなことでしかない、というわけだ。

では、彼のいう「高等の価値あるもの」、「社会の道徳に対して不都合なきもの」である〈小説〉とは、いったいどのようなものだろうか。それは、「書中の人物が実際に運動する傍らに立ち静かに之を見物するかの如き思ひあらしむるに至るもの」である。したがって、ここから逸脱した「勧善懲悪をむき出しにして巻末半数の間だに目出たし〳〵の結局」をむかえる「支那日本在来の小説」、すなわち「桃太郎」や「西遊記」などの「奇異譚」は、「高等の小説として愛読すべきものではない「愚らしい」読み物ということになる。そこで、巌本は、〈小説〉の良悪の基準を「実際の世態人情と相違する所なきや否や」という点に求めた。年少女子が、皮相の出来事に魅了されることなく物語世界の人情にふれることができたならば、経験のない人情を味うことができるからだ。その経験は、〈小説〉にふれてこそ味うことができる。そこに、女性と〈小説〉との関係を肯定した理由があった。

ここで確認したいことは、巌本が逍遥の提示した「仮作物語」の進化の過程を支持し、「支那日本在来の小説」を否定の対象として捉えたことだ。「自然の有のま、を写」してはいない昔話は、年少女子の読み物として相応しくはない。では、昔話に代わる読み物とはどのようなものだろうか。「桃太郎」に匹敵する読み物は、はたして存在するのだろうか。その答えのいとぐちを「子供のはなし」に求めてみよう。

「猿蟹合戦、かち〳〵山、又は舌切雀、花咲き爺」などのおはなしは、「たわひも無き談しのよう」でいて、「実は子供の為に至極宜しきを得たるお談し」である。しかし問題は、読むに値する物語の「数の少」いことと、「当今の頑是ある幼な子には適」さない話も含まれていることにある。たとえば、西洋であれば「ミスアルコットの如く特更らに小供の読むべき小説を作らる、」人もいる。また「セントニコラスの如く専一に幼な子の慰みに編集する雑誌」もある。更には「エソップ物語を初めとして其外数多のお談しを記るせる書物」がこどもに「勧懲の旨」を教えるために用意されている。しかしながら、日本には「此辺の教育に深く注意」したものがまだそろっていない。

そこで、巌本は、「子供のはなし」欄で「母親が其子供に話しきかするお談の編集」を行うことにした。〈物語〉は、「猿蟹合戦の物語を聞いて多少功名心を起」したり、「花咲き爺のお談しを聞いて狡猾の悪徳たる由を感」じたように、子どもの心に何かしらの影響を与える。逆に、悪い景況を受けたならば、それは「後世の子孫をして均しき恨みを懐かしむるの元因」になる。そこで、彼は「母親方が其子に語らる、為に宜しきを得たりと覚ゆるお談しを集め」、その「お談し」の「筋書を書」くことに徹した。話を「面白くも可笑くもするのは母親」の「便口に任」せたのだ。なぜならば、「母親」が「子の性質によりて法を説くの工夫」をすればよいからだ。

彼は、子ども一人ひとりの性格を知らない。知らない自分が自己の判断で「お談し」を書いたならば、それは自分の「妄想」を一方的に押し付けることになる。傍観者である彼は、傍観者らしく「筋書」を提供することに徹したのだ。「書中の人物が実際に運動する傍らに立ち静かに之を見物するかの如き思ひ」を与えるために、自らも傍観者として「お談し」を

提供することに決めた。果たして、「小供談」欄は、彼が望んだように彼を活躍させてくれたのだろうか。「小供談」欄を詳細に見てみよう。

「お談し」を語るとは？――「小供談」の役割――

「子供のはなし」「小供談」欄は、「二附録の序」が掲載された次号第九六号からはじめられた。巻末に掲載されたこの欄は、第百拾壱号からタイトルを「小供談」に変えている。第九六号から第百五拾九号までの間、紙幅に余裕のある限り掲載され、回数は全部で五〇回に及んだ。ここで紹介された「お談し」は、全部で三六話あり、そのうち翻訳されたもので原作がわかっているものが九作品、原作が不明のものが一四作品、創作であると考えられるものが五作品、科学の読み物が一作品、残りの七作品は、日本に伝わる話を引用していると考えられる。執筆者は、巌本以外に六人いた。[6]

内容や構成、文体を確認すると、構成に特徴のある作品が三作品ある。第九八、九九号に掲載された「忠義の家来二人」、第百拾参、百拾四号に掲載された「義の為に死せる人」、第百拾五から百拾七号に掲載された「盲目の物語」である。その特徴は、冒頭と末尾が物語とは別に用意され、語り手の語る物語の導入と寓意を示した結論として存在していることである。なかでも、初期に掲載された「忠義の家来二人」は物語言説に、「義の為に死せる人」は物語内容に三段階の構成を選択した意図を見ることができるだろう。特に、「義の為に死せる人」は、「お談し」というよりはむしろ、冒頭と末尾での主張を具体的に説明するために物語を利用しているようにも見える。その語り方は、ほかの二作と比べて、語り手の意思が明確である分、特異であるといえる。

また、号数が進むにつれて、文体にも変化が見られる。冒頭に語り手である盲人が登場し、自分が盲人になるまでの経緯を物語っていく「盲目の物語」は、初めて〈物語〉を一人称で語っている。「私は」で始まる文体は、文末表現にも影響

を与えている。この作品から「私はこの話を聞きまして飛立つ計りいら立ちまして先づ一匹の驢駝に積む丈の宝を和尚様に上げる程ドーゾ其処へ誘ひ下されと申しました」（傍線は引用者）という表現を生んだ。「私はこの話を聞きまして飛立つ計りいら立ちました」という文と、「先づ一匹の驢駝に積む丈の宝を和尚様に上げる程ドーゾ其処へ誘ひ下されと申しました」という文を、前の文の文末を「いら立ちまして」に変えてつないで見せたのだ。これは、第百弐拾壱、百弐拾弐号に掲載されたグリム童話「かほうにくるまったハンス」の翻訳である「心の変り易き人」にも見られる。「金持の息」あるいは「彼の旅人」という三人称で語られた物語は、文末を「彼の旅人は大層立派な鶏であると少し欲しき心を起しまして其人の方へ向きまして其由を申しました」と変えつつ連続した文章でつなぎ、物語の時空を自在に操ることに成功した。

「お談し」の掲載を通して構成や文体の工夫を重ねたなかで、語る方法に一定の規則の見られる作品が、第百参拾八から百四拾弐号にかけて掲載された「正直なる小娘」である。この作品は、主人公であるヘッチーとの会話部分は改行し、地の文よりも一段下げて表されている。また、主人公と関係のない第三者同士の会話部分は「「モシ士官私しが問ふて見ませうお任せなさい」」というように「　」入れて表現している。ほかにも、情景描写や心情描写などは「ハイさうですと（云ふや否や両眼よりハラ〳〵と涙だを落したり）。」というように（　）に入れて表現するなど、さまざまな工夫が施されている。その結果、短い文章で場面や状況を表現することに成功している。

この作品を掲載した次号から、山田美妙の創作や蜘蛛の生態を解説した科学の読み物、小噺を掲載するなど作品が多様化したことを考えると、「正直なる小娘」は、「小供談」欄における試みを考える上で重要な作品であると考えられる。さらに、第百六拾号から新たに「児籃」欄が章に加わり、若松賤子「小公子」、「忘れ形見」などが掲載され、作品の内容は一層多岐にわたる。[7] いったい、巌本は「小供談」で何を試みたのだろうか。仮に、「正直なる小娘」をこの欄に掲載した「お談し」の集大成であるとするのならば、「小供談」欄でのさまざまな試みを解き明かす鍵を構成や文体が特徴的な作品である「忠義の家来二人」、「義の為に死せる人」の二作品に求めてみよう。

まずは「忠義の家来二人」である。早期に掲載された作品で、母親が語り手として登場し、後の作品と比較して、こどもに「語りきかする」ことに重点を置いた文体であるといえる。要するに、執筆者である巌本が世間の母親に代わり、子どもたちに「語る」ように「お談し」を書いているのだ。したがって、全体を通して「お聞きよ」とか「覚召してね」というように、語り口調が選択されている。冒頭部分を確認してみよう。

冒頭は、「坊や嬢やお前方忠義なお家来が欲しくばイクラでも貰われますから温となしくして少し母の言ふことをお聞きよ」というように、母親からこどもへの語りかけで始まる。語りかけるような文体は、「お談し」の本編に入っても変らない。「お談し」を母親がずっと「語りきか」せていく。たびたび現れる「仰しやつてね」や、九八号の終わりに書かれた「今晩はモウ遅いからまた此次にお話し、ませう（略）今晩はよく考へてお息みなさいよ」などは、まさに子どもへの語りかけである。結末でも、母親が子どもたちに向けて「決して土や水をひどく使つては成りませぬ、（略）お前方は一層温和しくして人の言ふことを聞き又たとひ何んな自分の利益にならないことでも人のお為になることならば身を粉にしてでも働かねばなりませぬよ」と語りきかせている。

これは、「二附録の序」で巌本が「筋書」だけを書き、「母親御自身」によって「子の性質によりて法を説」いてもらうとした目的からは逸れている。しかしながら、母親に「語りきかする」経験がないのならば、「お談し」を語るように書き続け、語るという方法を提示しなければならない。そのためには、作品全てを語り口調で書きあらわす必要がある。「小供談」の目的を果たすためには、掲載開始から早い時期に必要な「お談し」だったといえる。そして、語るために選択された語り口調の文体は、やむなく「語りきかす」ことを実践するために選出された文体だった。結果として、語るように書かれた言文一致体だったといえる。

次に「義の為に死せる人」を見てみよう。この作品は、題名の下に「附り当欄内を借りて母御衆に一言申上ぐ」と副題が付いている。「お談し」というよりは、巌本から母親たちへの希望と提案をまとめた意見書としての性格が鮮明に現れて

いる。その意見とは、〈物語〉を通した子どもの情操教育に母親はいかに関わることが適当か、というものである。

彼にとって子どもとは、「美し」く「柔か」で「汚のなき白き子羊の如き」存在である。純粋で無垢な「小供」に「お談し」を「語る」ことは、「知識を啓き道念を強よめ感情を清く高からしむる」ことを意味する。特に、「感情を高くすると云ふ事」は、「人の気付かぬ事」だが、最も重要なことであり、「我邦人の欠ける点」である。「感情」とは、「高ひ低ひの有るもので」、同じ花を見ても「其感情の高ひ低ひに従ひて」受け取り方が大きく異なる。「日本人」というものは、「感情はあれど皆卑き賤しき感情」が多く、「無情を嘆き桃源の流を慕ふ」傾向が強い。したがって、日本人は西洋の「格高き小説」にふれる必要がある。このように考え、フランスに伝わる物語を語り始める。

その内容とは、勇敢で立派な味方の大将が、これまた勇敢で立派な敵の大将を自分の命を犠牲にしてまで助けてやると、そのことが発覚してしまい味方の大将は軍罰に処せられ殺されてしまう。ところが、この立派な味方の大将を死刑に処した法官も自分の行為に矛盾を感じ自ら命を絶ってしまうという物語である。どちらも義のために自分の命を惜しまないその姿に、巌本は西洋の「感情」を見ているのだ。そして、彼は末尾で母親たちに親としての教えを語る。

自己を犠牲にできる勇敢な「感情」は、「自然と何時間にやら起るもので」「久しき間の教育が必要」である。この「情」を育てるには、「子供衆の心」から育て始める必要がある。子どもに「感情」を教えられるのは「母親」である。「母親」が「子供の前」で「善悪」や「美醜」を簡単に口にしてしまったら、このような「格高き」「感情」を育てることができない。そして、「子供に向ひてお話をなさる人は言葉の遣ひやうより総て子供の感情を高くするやうおん心得」を持って子育てに励んでほしい。

この発言は、逍遥の「祖母、母親」への発言と通底している。逍遥は彼女らの多くが「寓言の書」の「深意」を正しく解せないと明言した。しかしながら、女性啓蒙の旗手であり、キリスト教信者だった巌本は、母親による教育によって新しい時代の慈悲深い人間の育成は可能であると信じていた。その違いが明確にあらわれた作品であるといえる。

「小供談」欄は、こどもに「語りきかす」ことを目的にしてはじめられた。はじめは、こどもに語るためだけの「お談し」を掲載する予定だった。ところが、「お談し」を掲載するのではなく、「語りきかす」ために「お談し」掲載するには、単純に書くだけではいけない。「語りきかす」ための方法を見つけなければならないのだ。「お談し」を「語る」という行為と「読む」という行為の間には、大きな隔たりがあった。では、「語る」にはどうすればよいのか。

巌本は、「お談し」の「筋書」をはじめから語るように書き続ける方法を選んだ。その結果、「仰しやつてね」とか「お聞きよ」のように、地の文と物語の筋との間にしばしば語り手が登場することになる。しかも、語り手がべったりと出来事に寄り添い、初めから終わりまでを順序どおりに語る方法以外に、ふさわしい語りの手段は見当たらない。どのようにすれば、物語の時空間を独自の世界として縦横無尽に往復することができるだろうか。

彼の課題は「語る」ように物語の「筋書」を書き表す方法を見つけるだけではなかった。どうしたら、新しい時代に相応しい価値観や考え方を子どもに植えつけることができるのか。たとえ相応しい文体が見つかり、「感情」のある物語を書くことができたとしても、それを「語りきかす」側の母親に内容を解釈する素地が整っていなかったのならば、この取り組みは意味を成さない。はじめに行わなければならないことは、母親たちに「小供談」に寄せる自分の深意を理解させることだった。

「忠義の家来二人」、「義の為に死せる人」に見られる試みは、この欄を通して巌本が取り組み、結実させようとした課題の提言であるといえる。多くの「お談し」を積み重ね、文体や内容の試行錯誤を繰り返した集大成が「正直なる小娘」であるといえる。内容、文体、構成の三点が理想的に結合し、巌本が思い描く宗教的効果の高い物語に仕上げられた。つまり、文体の完成度ばかりでなく、内容においても、主人公の「小娘」ヘッチーは、巌本の思考を具体化した人物として完成されていたのだ。

「正直なる小娘」以降、巌本の執筆した作品から〈物語〉は消滅する。入れ替わるように、蜘蛛の生態を説明した「蜘蛛

のはなし」や小噺である「豆腐の上の相撲」など、「小供談」の「はなし」の質をかえた「お談し」を描いた。「子供に語りきかす」「お談し」の結実を「正直なる小娘」に見た結果、「小供談」の当初の目論みは成功したといえる。その結果、「小供談」は終了し、創作を中心とした「児籃」が開始されたのだ。

「小供談」の意義——試みとしての〈児童文学〉——

坪内逍遥の「小説神髄」に着想をえた巌本善治は、逍遥の考える「仮作物語」の進化の過程に自分の考えを重ね合わせた。唯一、逍遥と違う視点で彼が発言したのは、〈小説〉の読者に女性や年少女子を認めた点である。それ以外は、逍遥の考えを支持し、その延長線上で〈小説〉に関する提言をした。逍遥の延長線上で昔話を否定した巌本は、昔話にかわる新しい「お談し」を提供することを思いつく。西洋にある多くの〈物語〉を翻訳すれば、「お談し」は提供できる。さらに言えば、〈小説〉は、「書中の人物が実際に運動する傍らに立ち静かに之を見物するかの如き思ひあらしむるに至るもの」であるから、自分が傍観者に徹し、「筋書」さえ提示すれば、あとは母親がこどもに「見物するかの如く」「語りきかす」だけである。

ところが、実際に「小供談」をはじめてみると、物語の「筋書」だけを書き記すことは思いのほか難しかった。なぜならば、「お談し」を語ったことはあっても、「お談し」を「語る」ように書いたことはなかったからだ。問題はそれだけではない。「猿蟹合戦」や「花咲き爺」などの昔話しか知らない日本の母親たちに、西洋の物語やものの考え方を理解させなければならない。単なる翻訳では、逍遥が「寓言の書」について発言したように、「祖母、母親」たちに「たゞひと通りのつくりばなし」として解釈されてしまう。「寓意の旨」を解させるには、理解を促すための発言を行う必要がある。

巌本の考えた当初の企画意図を大きく超えて、彼は、「小供談」欄で文体や内容の質を高めるためにさまざまな試行錯誤

を繰り返すことになった。文体や内容の問題を鋭く捉えた「小供談」は、言文一致体の構築という文壇の課題と深く関わり、その一端を担ったといえる。[8] 傍観者として母子に「お談し」の「筋書」を提示したはずの巌本は、実際は傍観者ではなく、具体的に〈物語〉に関わってしまう語り手の存在を提示し、語り手の姿をできるだけ透明に近づけられるように努めるなど、〈物語〉の文体や内容に深く関わらなければならなかった。

しかしながら、女性の啓蒙を掲げ、『女学雑誌』の編集にあたっていた巌本善治が、言文一致体構築の一端に関わっていたことは、評価に値するだろう。ただ、彼の文学に対する姿勢は、実作者の文学に対する姿勢とはやや異なっていた。彼が森鴎外との間で繰り広げたいわゆる「文学と自然論争」は、彼の文学観の根底に、自然美を尊重し善を内包させ、それを宗教的理想に高めようとする意図があることを露呈させた。「実際」を重んじ、「自然の有様に随ひて自然のまゝに写す」という素朴な文学観は、「空想」の織りなす美しい「顕象」が文学であるとする鴎外の文学観とは相容れない。鴎外は、「自然の美は塵を含めり」といった。善も悪も入り混じる「自然」の「塵」を「「想」火」によって極限まで「焚キ尽シ」「術美」に作り上げる。そこに文学が「美術」として成立する理由がある。決して「自然の儘の自然は美」ではないのだ。「「自然」ニ附帯セル多少ノ塵埃ヲ「想」火ニテ焚キ尽シ」た上にだけ、虚構の世界は誕生できる。つまり、「自然」を再構築して「製造」された虚の世界は、宗教倫理や道徳的判断で善悪を判定できる世界ではないのだ。

あくまでも「仮作物語」は「美術」である以上、道徳的判断や宗教倫理は物語世界に介入できない。しかしながら、巌本は「実際」を「自然のまゝに写」せば理想的な虚の世界が構築できると考えた。理想を発表する手段として文学を選んだ政治小説の作者と何らかわりがない。「小説論」の冒頭で、「日本近年の形勢を評せば過る明治十三四年の此ほひは蓋し所云る政治慷慨の時なり当今明治二十年前後の時代は即はち小説流行の時勢なり」と、〈小説〉の流行を捉えた。つまり、手段として〈小説〉を捉えていたのだ。その姿勢に巌本の〈小説〉に対する視野の狭さを見ることができる。結果的にいえば、彼にとって文学とは、宗教的理想を高め、それを流布させる手段でしかなかったのだ。

しかしながら、彼の宗教心や道徳的判断は、未成熟で教育を必要とするこどもに目を向ける契機となった。時代に相応しいこどもの「感情」を育てるには、従来のものを否定し、新たな価値観を示すほうがわかりやすい。「お談し」を「語りきかす」行為は、文体や内容に関わる文学の問題だけを抱えているわけではない。こどもという存在に、相応しい「お談し」があること、また、人間の成長に必要な〈物語〉が存在することを提示した。〈児童文学〉という名称はまだ用意されてはいなかったが、「小供談」は、〈小説〉とは別に、こどもを対象とした〈物語〉の存在を社会に提示したといえる。つまり、『女学雑誌』「小供談」の試みは、「大人、学士」の読み物である〈小説〉にかわり、「子供」の読み物である〈物語〉、すなわち〈児童文学〉を成立させる試みだった。そして、この〈物語〉は、〈小説〉の構成や文体に多大なる影響を与えたのである。

注

(1) 福田清人 「明治の児童文学」『児童文学のすすめ』 昭和四十一・五 愛育出版社

(2) 『女学雑誌』「小供談」欄は、設置当初の名称を「子供のはなし」といった。名称の変更理由は示されていないが、「お談」を紹介するという目的にあわせて「子供のはなし」よりも意図を明確に示すために、名称を「小供談」に変更したと考えられる。そのため、本稿では、この欄の名称をあらわすために「子供のはなし」ではなく「小供談」という表記を採用した。ただし、「二付録の序」の「子供のはなし」欄を示す場合と、この欄の変遷を示す時に限り、「子供のはなし」の表記を採用した箇所がある。

(3) 「英国にていふフヘイブル」とは、英語表記にすると「fable」であり、一般的に「寓話」と訳されることが多い。代表的な「寓話」に「イソップ物語」がある。アリストパネース、プラトン、アリストテレス、ヘロドトスの発言とそのほかの口承寓話群を採録した「デメトリウス・パレロス、アイソポス寓話集成」が紀元前三百年頃に、それとは別の「アヒカル物語」が紀元前六世紀から五世紀頃にそれぞれ存在し、これらが長い年月を経て「シュタインヘーヴェル編イソップ集」として一四八〇年頃にラテン語とドイツ語で発表されたのが原型となっている。また、中国の春秋戦国時代に活躍した諸子百家と呼ばれる思想家たちの学

説も、「寓言」といわれる。逍遥は、これらをふまえて「寓言の書」を「フヘイブル」と呼んでいる。

(4) たとえば、『イソップ物語』では、農民たちをからかっていた少年が、本当に狼に襲われたときに誰からも救助されなかった「羊飼いの少年と狼」や、肉をくわえた水面の自分の肉を横取りしようとしたら、くわえた肉を水に落とした「犬と肉」のはなしがある。また、『荘子』の寓意では、「無用の用」について説いた外篇山木篇第二十第一章「山の木と雁」や、効率の悪い畑仕事をする老人にはねつるべの利便性を説いた孔子の弟子・子貢が、功利の優先が堕落への一歩であると告げられる外篇天地篇第十二第七章「効率の悪い畑仕事」がある。

(5) 「二付録の序」のもう一つは、「第二。小説神髄」という名で、それぞれ「孩提の翁」、「月の舎しのぶ」が担当しているが、この二者はいずれも巌本善治本人である。「第二。小説神髄」では、一つの作品を詳細に翻訳する趣旨を明記している。

(6) 翻訳では、第百弐拾八号「黄金の鮎」を山中由美子、第百弐拾九号「言葉を慎む事」、第百五拾九号「不親切なる馬の話」を宮規子、第百五拾弐、百五拾参号「幸福を求むる種々ある事」を喜の音、第百九、百拾壱、百拾八、百拾九、百弐拾弐号「印度物語」のシリーズを大島千代子、創作では、第百四拾参号「強くなりたがる猫の話」を山田美妙、第百五拾六号「小鳥のはなし」をりょう子が執筆した。

(7) 「児籃」欄は、第百六拾号から第百八拾参号まで掲載された後、第貳百四拾号まで「小説」欄に組み込まれ、第貳百四拾壱号から再度「児籃」欄として独立している。「忘れ形見」と「少公子」の一部の掲載は、「児籃」欄の消滅期にあたっている。しかしながら、これらの作品の性格や「少公子」の後半部分が「児籃」欄に掲載されていることから、これらの作品を含めた若松作品は「児籃」欄に掲載するために用意された作品として取り扱った。

(8) 坪内逍遥『当世書生気質』、『妹と背かゞみ』から二葉亭四迷『浮雲』に至るまでの文体の変遷に「小供談」の試みは入れることができる。特に、『浮雲』の出版時期と重なることからこれらが互いに影響を与えていたと考えられる。具体的な検証は今後行うこととし、ここでは巌本善治が逍遥や二葉亭の文体に影響を与えていることだけを指摘しておく。

※なお、引用部分の漢字は、新字体に改めた。

(文学部非常勤講師)